

第 部門 嵐山の景観構造 ～シークエンス景観の観点から～

大阪工業大学工学部 学生員 ○藤井義令
 大阪工業大学工学部 横田充信
 大阪工業大学工学部 安永達矢
 大阪工業大学工学部 正会員 吉川 眞

1. はじめに

わが国では、戦後から高度経済成長期にかけて、生産性重視の都市整備が行われてきた。その結果、生活水準が向上し生活は豊かになり、都市には高層建物が立ち並ぶとともに、技術の発展から快適で便利な社会となってきた。その反面、昔ながらの自然や街並みといった地域特有の伝統や文化を育んだ歴史的な景観が失われてきた。この反省から、古都保存法などの規制により、歴史的景観や寺院や仏閣などの歴史的建造物も、今後は残されていくことであろう。

山や河などの自然は、都市景観の背景として重要であり、地域のランドマークとしての役割を果たす場合もある。わが国の伝統的なデザイン技法にも、庭園の背景に自然の山を加えて一枚の絵のように見せる「借景の技法」がある。また、古くから観光地として人々を惹きつけてきた地には、山や河を背景に抱えている所も多くあり、これらには現代でも人を癒す力や惹きつける魅力がある。

2. 研究目的と対象地域

本研究では、自然の山を借景とするシーン景観ではなく、観光地として重要な意味をもつルートという観点、すなわちシークエンス景観の面から考えることで、山と観光ルートとの関係を分析し、魅力ある観光ルートの構築を目指している。そこで、観光地という古くから人々を惹きつけてきた地に着目し、観光地を形成してきた景観構造を明らかにすることを目的とした。

そこで、歴史のある寺院や庭園が山麓に多く存在し、京都の代表的な観光地である嵐山とその周辺を対象地域とした(図-1)。嵐山地域は、山や河に囲まれており、その景観の中には自然が多く取り込まれている。また、世界文化遺産「古都京都の文化財」として登録されている天龍寺もある。この天龍寺周辺にも多くの寺院が存在し、各寺院からも嵐山を眺めることができる。そのため、多くの観光ルートが存在するとともに、これら寺院自身も観光資源となっている。



図-1 嵐山の位置

3. 研究方法

まず、店舗名やマンション名などで「嵐山」の名称が使用されている建物の検索を行いデータベース化したのち、GISを用いて数値地図上に表現することで、住居表示だけではなく嵐山地域の範囲を特定している。また、「嵐山」の名称使用を景観構造の観点から分析している。さらに、シークエンス景観という面から「嵐山」を捉えるために、嵐山地域の観光ルートに着目し観光ガイドブックなどに掲載されている観光ルートへの街路の出現頻度を調べ、代表的な街路上での嵐山の可視・不可視分析を行って、街路と嵐山の間にある「見えの位置関係」を探った。なお、可視・不可視分析のために、航空機レーザ測量(LIDAR)データなどから、対象地の数値表層モデル(DSM: Digital Surface Model)を作成している。

Yoshiharu FUJII, Mitsunobu YOKOTA, Tatsuya YASUNAGA and Shin YOSHIKAWA

4. アドレスマッチングによる地域としての「嵐山」

「嵐山」という地域は、住居表示では大堰川の右岸側のみに存在し、左岸側は「嵯峨」という表示になる。しかし、京福電鉄嵐山駅・JR 嵯峨嵐山駅や天龍寺といった観光客の集まる場所の多くは、左岸側に位置しており、住所だけで観光地としての嵐山地域を把握することは難しい。そこで、観光地としての「嵐山」の範囲を特定するため、インターネット上の電話帳、「イエローページ」で「嵐山」と「嵯峨」が名称に含まれる店舗の検索を行った。「嵐山」を名称に含む店舗として 122 件、「嵯峨」は 117 件が検索された。このイエローページにより検索した店舗名、郵便番号、住所をデータベース化し、CSV アドレスマッチングサービスを用いて、各店舗の座標値を抽出した。その結果、「嵐山」と名称のつく店舗は、渡月橋を中心にした大堰川の右岸側と左岸側の両方に多く位置しており、一方、「嵯峨」と名称のつく店舗は大堰川の左岸側にしか存在せず、JR 嵯峨嵐山駅を周辺に多く位置していた。さらに「嵐山」と名称のつく店舗は嵐山を見ることができる範囲に多く位置していると予想できる結果となった(図 - 2)。そこで、観光地としての「嵐山」の範囲を特定するために、シークエンス景観の観点から嵐山の可視・不可視分析を行うことにした。

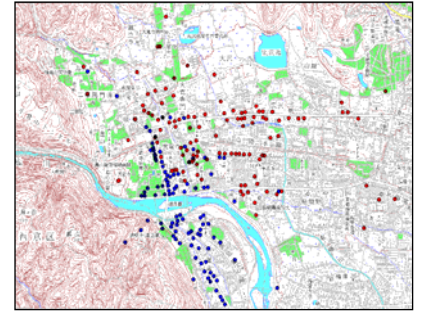


図 - 2 アドレスマッチング

5. 観光ルートからの可視・不可視分析

まず、観光ルートとして利用される街路とその出現頻度などを調べた。観光ガイドブックに掲載されているモデルコースは全 17 ルートであった(図 - 3)。モデルコースへの出現頻度が高い街路と低い街路に分け、出現頻度の高い街路において可視・不可視分析を行っている。

可視・不可視の分析を行う際に使用する DSM を作成するために、数値地形モデル(DTM: Digital Terrain Model)と建物データの作成を行った。DTM 作成のために GIS を用いて交差点ポリゴンを作成し、LIDAR データから各ポリゴンの最頻値算出を行い、TIN(不定形三角形網)を生成することで DTM を作成している。なお、交差点の存在しない山岳地域の DTM 作成には数値地図 50m メッシュ(標高)を使用している。

次に建物データを作成するために、都市計画基本図に記載されている建物外形を GIS により数値地図上へトレースしたのち、DTM と同様に最頻値の算出を行い、これらを建物高とする建物データを作成している。さらに、DTM と建物データをマップ演算することで、建物などの地物を考慮した地形データ、すなわち DSM を作成している。この DSM を用いて、観光ルートとして出現頻度の高い街路上に視点を設定し、可視・不可視分析を行っている(図 - 4)。



図 - 3 嵐山の観光ルート

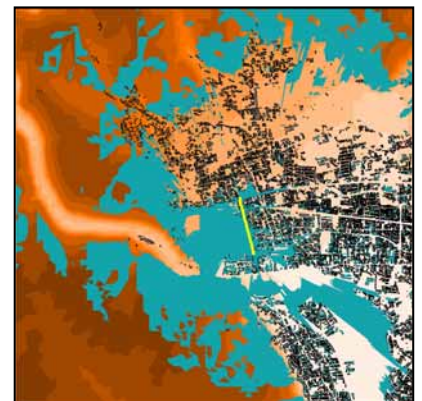


図 - 4 可視・不可視分析

6. おわりに

本研究では、景観資源の集積地である観光地という観点から嵐山地域の特定を行った。さらに、街路上からの嵐山の可視・不可視分析も行っている。その結果から、嵐山の可視性に対して観光ルートに面する建物が阻害要因として大きく影響していることが把握できた。

今後は、建物モデルをより精緻化するとともに樹木なども考慮した DSM を作成し、可視・不可視分析の精度を向上させようと考えている。さらに、代表的な寺院における拝観ルート上での嵐山などの可視性分析や、他のランドマークへの展開などによる新たな観光ルートの開発・提案にも繋がりたいと考えている。

【参考文献】山本四郎：京都府の歴史散歩、山川出版社、2001 年